

後漢末 荊州学派の研究

野 沢 達 昌

一

漢代は前漢、後漢を通じて、その内容的変化、特殊的學術の一時的興隆は見られたが、全体的には儒教が絶対優位にあり、ゆわいる儒教独尊時代を形成し、漢民族の日々の生活、學問、政治に及ぶ全体をその理念のもとに支配したのである。

ところが、次の三国時代、更に晉朝に時代が推移すると、道家思想がにわかに興隆し、儒教は少なくとも學術、思想界においては、その地位を著しく低下する。

このように、漢代と次の時代の文化には極めて特徴的差異が認められるのであるが、もとより、そういう大きな変化が一時になされるとは考えられず、また、単に政治的社会的混乱による厭世的風潮を反映して、ただちに道家思想が興ったとも考えがたい。

ここでは、そのような方向への変化、或は發展が如何なる道筋を経てなされたか、また、そういう道筋を辿った要

因は何んであったかという問題について、此の時期に荊州において見られる学術を中心に、その他の地域での学術の活動をも関連的に把握して考察を加えたい。

後漢末期は、党人と宦官との激烈な相克、大規模な反乱、それに続く各地豪族の割拠によって、特にそれまで文化の中心であった華北一帯は擾乱の渦中と化した。

このころ、荊州学派を興した劉表は、荊州刺史に任ぜられた。それは、献帝の初平元年（一九〇）のことである。当時、江南は宗賊の勢力が強大であったが、劉表は南郡の蒯越、襄陽の蔡瑁等の協力をえて、これを平定し、荊州刺史としての基礎を固めた。⁽¹⁾

この時期には、中国全土が土崩大壊し、人民の生き残るものは百に二、三という状態であったが、劉表の統治する荊州はよく平安を維持し、興平元年（一九四）には、趙岐の求めに応じて宮室の修理のために多くの援助を与える程の余裕をみせている。⁽³⁾ その結果、このころ、荊州に流入した人民は十万余家にのぼったという。⁽⁴⁾

劉表は、建安三年には鎮南將軍荊州牧となっている。しかし、この年に長沙太守張羨の反乱が起きていて、劉表が荊州全域を完全に平定したのは、張羨の子の憚を降した建安五年（二〇〇）のことである。⁽⁵⁾ これによって、その勢力は、南は零陵、桂陽、北は襄・樊周辺、漢水の流域一帯に至る広大な地域に及んだ。⁽⁶⁾

劉表は州内の平定を終えると、いよいよ儒家的理念に基づく理想国家の形成に着手する。

その最も重要な政策として、劉表は広く学者を集め、学校を開立し、大規模な学術活動を展開したのである。荊州学派のひとりである王粲の著わした「荊州文学記官志」に、その間の事情について次のような記載がある。

有漢荊州牧曰劉。稽古若時、將紹厥績。乃称曰「於先王之為世也」。則象天地、軌儀憲極、設教導化、叙經志業、用建雍泮焉、立師保焉。作為禮樂以作其性、表陳載籍以持其志。上知所以臨下、下知所以事上、官不失守、民聽

無悖、然後太階焉。

右に見える学校の設立の時期は、「英雄記」や「後漢書」、「魏志」などの記載によって、張懌の反乱を平定した建安五年のことと考えられる。⁽⁷⁾

この年には官渡の戦いがあり、また、学界では大儒鄭玄が病卒している。

ところで、荊州学派が崩壊したのは、劉表が卒して、その子、琮が荊州をあげて、曹操に降った建安十三年（二一〇八）に当り、これによって、多くの学者は曹操に吸収され、⁽⁸⁾ また一部は建安六年（二〇一）から荊州に来ていた劉備と行動をとともにした。⁽⁹⁾ したがって、荊州における学校の存立期間は建安五年から建安十三年までであるが、劉表が荊州刺史として着任するころ荊州地方には多くの学者が流寓していた。例えば、有名な左伝学者潁容は、初平年間にその門徒を含む千人にもぼる集団を率いて荊州に来ている。⁽¹⁰⁾ また、建安七子として盛名のある王粲も、その時期に兄の王凱らとともに流寓しており、この他、隗禧、邯鄲淳ら多くの学者が初平年間に荊州に集まっている。⁽¹¹⁾

このことから、学校設立以前に、既に相当の学術活動が行なわれていたと見られる。

ところで、荊州学派は内容上、前期、中期、後期の三期に区分することができる。前期は、初平年間から建安五年までの期間で、上述のように、多数の学者が戦乱を避けて、おもに保身を目的として、荊州に流寓し、この結果、多様な学問が荊州に集中することとなり、その後の学術活動の基礎を形成した時期である。

次いで、建安五年から建安十年までを中期と見ることができ、この期間には、前期の基礎の上に、学校が開立され、そこで經典の大規模な集収とともに、多数の学者の協力によって、「五經章句」の撰定作業が行なわれ、多くの注解書も撰述された。既ち、この五年間は、荊州学派の活動期間の中で、最も輝かしい成果を収めた時期であった。このことについて「荊州文学記官志」は次のよう言う。

夫文學也者、人倫之守、大教之本也。乃命五業從事宋衷、所作文學、延明徒焉。宣德音以贊、降嘉禮勸之。五載之間、道化大行。耆德故老綦母闕等、負書荷器、自遠而至者、三百有餘人。

この記述の中で「五載之間」とあるのは、「搜神記」や「劉鎮南碑」などの記載を勘案すると、建安五年から建安十年ごろまでを指すと考えられる⁽¹²⁾。

なお、それ以後、建安十三年までを後期とする。後期の特質は、劉表政権の衰退とともに荆州学派の活動も停滞し、それまで、各地から集まって學術活動に参加していた学者が逆に劉氏政権の将来に失望して、各地に分散して行くという点にある。この現象によって、荆州学派の成果が諸地方に広められる結果となった⁽¹³⁾。

これまで、荆州学派の成立事情と活動時期について考察してきたが、次に、後漢末という時代状況の中で、荆州という地理的条件のもとになされた荆州学派の活動が、どのような意味をもつであろうかということを考えたい。

荆州は現在の湖南、湖北両省、更に広西、貴州、四川、広東の地を含む広大な地域であるが、そのうち、漢水の沿岸にあり、揚子江と黄河のほぼ中間に位置する襄陽が、この時期の政治・文化の中心地であった。

劉表の開立した学校もここにあったのであるが、ここは三輔の地からも便利であり、蜀や江南の諸地方との交通も容易であった。このような地理的条件にある荆州に劉表が着任し強大な軍事力を背景に平和を維持し積極的に諸方の名士、学士を招聘し、大規模な文化政策を推進した事は重要な意味を持つであろう。

即ち、後漢の儒学は学官では一、二の例外を除いては前漢に引き続き今文学が学ばれていた。しかし次第に劉向以来の努力が結実し、後漢末になると馬融、鄭玄らの古文学の大儒が出て今文学を圧倒する勢いを見せ、特に鄭玄は古文学を主としながらも、今文学をも受容し、新たな儒教体系のもとに統一しようとする活動を展開していた。このようにこの時期の學術は、儒学を中心として大きく変わりつつあったのである。ところで、中国全土は極度の擾乱状態に

あって、荊州のみが前述したような安定を維持していたので、中国各地から荊州に流入する者の数が非常に多かったことは先述した通りであるが、これに混じって多くの学者も初期には主に保身を目的として荊州地方に流寓したのであった。⁽¹⁵⁾ このことは、それ以前の学問の形態が師法家法を重んじ、或は一經専門というような形態であり、太学においても一つの傾向が固定化され学ばれるのが一般的であったが、荊州学派においては、戦乱を避け、身を保つ事を主眼として流寓したものが主であったから様々な学問が流入して、それ等が自由に接触しあう中では、その総合化、統一化が行なわれ、新しい理念に基づく学術活動が展開されていくのは、当時の学問の一般的傾向から見て、必然的方向であった。

二

ここでは、上述のような歴史的状況の背景の中で展開された荊州学派の活動について、具体的にどのような学術、思想が、どのように総合され、統一されたか、また、その後の学術の発展にどういう形で影響を与えたか、という問題を明らかにするため、繁雑ではあるが、荊州学派の代表的学者について、少し詳細に見てゆきたい。

はじめに、荊州学派を興した劉表について見ると、劉表は山陽高平の人で荊州における治績は上述したとおりであるが、その学的傾向については、清の焦循は同郡の王暢に根本すると見てい、⁽¹⁶⁾ また、後漢書にもそのことが記されている。⁽¹⁷⁾ しかし、「後漢書」は王暢の学問の内容については何も伝えていない。⁽¹⁸⁾ ただ、「後漢書」の劉表伝と党錮伝に、八顧、或は八及の一人に劉表が数えられていたとある。⁽¹⁹⁾ 顧は、德行によって、人を導くもの、及も人を導き追宗するものという意味であって、ほぼ同意である。したがって、劉表は儒者としてただ学問のみを行なう人ではなく、若い時から、むしろ儒教的理念によって人を教導するという実践面に優れていたと見ることができよう。それは荊州学派

における劉表の位置と行動のうちにもよく表明されている。⁽²⁰⁾

劉表の具体的な学問についてはよく知ることができないとはいえ、劉表の理念を実現するための一環として行なわれた荊州学派の活動のうちに間接的に表明されている。⁽²¹⁾

この劉表のもとで荊州学派の興隆に尽力した人に建安七子のひとりとして有名な王粲がいる。

王粲は字仲宣、山陽高平の人で劉表と同郷人であり、先記したように劉表が王粲の祖父王暢に師事する等、王氏と劉氏は世々深交があった。黄門侍郎に辟されたが就かず、兄の王凱等とともに荊州に乱を避けたのもそのためである。「魏志」二十一王粲伝は次のように言う。

王粲字仲宣、山陽高平人也。……年十七、司徒辟詔除黄門侍郎、以西京擾乱皆不就。乃之荊州依劉表。

劉表に依ってからは、表には「不甚重也」というように軽視されていたようであるが、その才能はそれより以前、蔡邕によって驚異のうちに認められていた。そうして蔡邕の所持していた当時としては非常に大部な書籍を悉く与えられていた。⁽²³⁾ 王粲は文学に秀で、とりわけ辞賦をよくした人で、有名な建安七子の一人である。⁽²⁴⁾

王粲は、また、非常に博物多識の人で、戦乱によって忘失されてしまった諸制度文物を再興している。その記憶力は同行者の前で路边にあった碑文をただちに誦誦し一字も誤らなかつた程であつた。⁽²⁵⁾ 王粲の学的傾向について見てみると、顔之推の「顔氏家訓」に鄭玄の「尚書注」に対する反駁があつたことが記されている。⁽²⁶⁾

吾初入鄴與博陵崔文彥交遊。嘗說王粲集中難鄭元尚書事。

王粲は尚書の他に「荊州文学記官志」によれば五經全体に精通していたことが分るが、それは後述するような荊州学派の経学に対する理念と一致するものである。また、上述の反鄭玄の立場も荊州学派に共通した立場である。

ところで、劉表が建安十三年に病没すると後継者劉琮に、曹操に降ることを進めて成功してい、曹操は王粲を辟し

て丞相掾に除し、関内侯に列している。更に軍謀祭酒を経て、建安十八年には侍中を拜している。しかし、建安二十一年南征の軍に従い、翌二十二年、途中、病を得て卒した。年四十一歳であった。次いで建安二十四年にはその二子が魏諷の反に加わって誅せられ、この時王粲の家系は絶えたが、文帝のはからいで族兄の王凱と劉表の女の子王業がその後を續ぐ事になり、蔡邕が王粲に与えた書及び荊州学派関係の書籍の全部を蔵することとなったのである。そうして、王業の子が王弼であって、彼が若冠にして魏玄学界の主峰となり得たのには、このような家系的優秀性の継承と当時としては極めて恵まれた豊富な蔵書、更にその蔵書の傾向が主要因としてあげられる。

次に、荊州学派では春秋左氏伝が重要な位置をしめていたが、荊州には有名な潁容がいた。潁容は字を子嚴と言ひ、陳国長平の人であったが、後漢末の擾乱に際し、初平年間荊州に流寓した人である。

潁容は左伝学者として有名であり、荊州に來た時には、その門徒多数を率いてきている。

「後漢書」卷七十九下儒林伝潁容伝に次のようにある。

潁容字子嚴、陳國長平人也。博學多通、善春秋左氏。……初平中、避乱荊州、聚徒千餘人。劉表以爲武陵太守。不肯起、著春秋左氏條例五萬餘言。建安中卒。

ここに「聚徒千餘人」とあるのは潁容の学問的弟子が大部分を占めていたと見て間違いないようである。というのは、当時の学問界の状況は官学が衰退し、私学が隆盛していて、全国各地に私塾的形態の学問の場が発達していた。そこでは何百何千、時には万を超える学士が集まっていたのである。潁容の集団もこれと同一の性格を持っていたものと考えられる。

したがって、初平年間（一九〇～一九三）には潁容門下生だけを取っても千人近くが荊州に流入したことになる。このことは、荊州学派の学問活動が初期の当時から非常に活発な状態にあったことを物語っている。⁽²⁷⁾ そうして、潁容

が有名な左伝学者である所から、その門徒も当然左伝学者を中心とした古文学的傾向をもっていたものと考えられ、その後の荊州学派の活動に大きな影響を与えていると言えよう。

次に、左氏伝に精通し、また古文学全体にも通じていて、荊州学派の五業従事として、荊州学派の活動の中心的役割を果たした南陽章陵の宋忠（衷）についてみると、まず「魏志」劉表伝集解に次のような記載がある。

惠棟曰、經典序録云、宋衷字仲子、南陽章陵人。後漢荊州王等従事。衷與忠通。

五等従事の五等と五業従事の五業は同じ意味で五経の従事ということで荊州学派の最高責任者である。ところで、劉表が荊州に五業従事を置いたのは先述したように荊州に学校が創建され、学術に関する組織が整備充実された建安五年（二〇〇）であったと考えられ、従って宋忠が荊州の五業従事となったのもこの頃である。⁽²⁸⁾ 宋忠が荊州学派に加わった時期は明瞭ではないが、建安五年からは荊州学派の中心として「五経章句」の撰定等の活動を行なっている。

また、「荊州文学記官志」の記述によれば、学校開立以前から、既に荊州学派の中心的学者と目されていたから、初平年間には荊州学派の活動に参加していたようである。このように宋忠は荊州学派のほぼ全期間を通じて劉表のもとにあったと考えられるが、劉表が病没して劉琮が後を継ぐと王粲、越嵩、傅巽等の曹操への帰順グループに加わったらしく、建安六年（二〇一）以来、劉表に依っていた劉備にそのことを報告する使者となっている。⁽²⁹⁾

宋忠はその後、曹操に帰順し魏に入ったが、建安二十四年（二一九）九月、西曹掾、魏諷の反にその子が加わったため共に誅殺されてしまった。⁽³⁰⁾

その間、魏にあってどのような活動を行なったかは明確にしがたいが、ただ「魏志」王肅伝に王肅に対し、「太玄経」を教授した事が見えている。

（王）肅字子雍。年十八、従宋忠読太玄、而更爲之解。⁽³¹⁾

この記述によれば、王肅は更に「太玄経」の注解書を著わしたとあるが、「蜀志」の李譔伝によると、宋忠に学を受けた父李仁より受業した李譔の学問が王肅の学と同一傾向にあったとある。このことは王肅の学問が荊州学派、特に、宋忠の学から多く影響を受けて形成されたことを示している。「蜀志」卷四十二、李譔伝に次のような記載がある。

李譔字欽仲、梓潼涪人也。父仁字德賢。與同縣尹默俱游荊州。從司馬徽、宋忠等學。譔具傳其業。……著古文易、尚書、毛詩、三禮、左氏傳、太玄指帰、皆依準賈、馬、異於鄭玄。與王氏殊隔、初不見其所述、而意帰多同。ところで、この記述によれば、荊州学派の影響は蜀にも強く認められるが「蜀志」卷四十二、尹默伝では、その事について次のように言う。

尹默字思潛、梓潼涪人也。益部多貴今文而不崇章句。默知其不博。乃遠游荊州、從司馬德操、宋仲子受古學。

このように荊州の学は、尹默、李仁、その子李譔等によって、この地方に伝え広められたのであるが、特に尹默は建安十九年（二一四）に蜀の観学従事になっている事から彼を通して蜀の学界が荊州学派の影響を多分に受けたことが考えられる。⁽³²⁾ 所で尹默や李仁は宋忠とともに司馬徽からも学問を受業していたとあるが、司馬徽は字を德操と言い、潁川陽翟の人であるが、早くから荊州に流寓していたと考えられる。⁽³³⁾ 前記の尹默、李仁に関する「蜀志」の記載には二人とも宋忠とともに司馬徽にも学を受けたとあり、司馬徽も古文学に通曉していた荊州学派の中心的学者であったが、荊州における彼の立場は、宋忠が五業従事として劉氏政権と直結していたのと相違して、終始客観的立場をとっていた。それは彼が当時盛行していた人物評論に長じた人で、劉表に対して絶望的観測をもっていたためらしく、例え劉表が賓客の礼を以って遇しても司馬徽は一定の距離を保ち続けていた。「世説新語」注引司馬徽別伝にその事について次のように見える。

（司馬）徽字德操、潁川陽翟人。有人倫鑒識。居荊州、知劉表性暗、必害善人。乃括囊不談識。

しかし、司馬徽は龐徳公、諸葛亮、龐統等とは深交を結んでいたらしく、「襄陽記」に次のような記載がある。

諸葛孔明爲臥龍、龐士元爲鳳雛、司馬德操爲水鏡。

司馬徽の卒年は、「世説新語」注引司馬徽別伝の記述によれば、建安十三年頃である。

荊州破、爲曹操所得。操欲大用、會其病死。

以上考察してきた学者は皆古文学を基礎としているが、荊州学派には、次に見る綦母闔のように今文学者も含まれていた。

綦母闔は「魏志」陶謙伝注引謝承書によれば、東莞の人であるが、趙昱に公羊伝を教授した、とあるから今文学の学者であった。

趙昱就處士東莞綦母君、受公羊伝。

綦母闔が荊州学派の活動に加わった時期は、宋忠等の活動によって、荊州学派の名が四方に知られるようになってからであるが、「荊州文学記官志」の記載によって、それは建安五年以後の五年間のことである。また、この五年間に撰定された「五経章句」の作成に綦母闔も加わっている所から、彼が荊州学派に加わったのはこの五年間のうちでも早い時期であったと考えられる⁽³⁴⁾。

荊州学派においては、潁容、宋忠、司馬徽等いずれも春秋に関しては左氏伝に精通していたが、ひとり綦母闔は公羊伝の学者で、しかも「五経章句」の撰定に宋忠とともに中心的役割を果たしたと考えられることは、荊州学派が今文学、古文学の対立を越えて、それらを統一しようとする方向に向っていたことを示すものである。荊州学派のこのような方向に沿い、魏の学界を指導した人に邯鄲淳がいる。

邯鄲淳は字を子叔と言い、潁川の人であるが、⁽³⁵⁾初平年間（一九〇～一九三）に華北の擾乱を避けて、荊州に来ている。「魏志」二十一王粲伝裴注引魏略に邯鄲淳について次のようにある。

淳一名竺、字子叔。博學有才章。又善蒼雅蟲篆、許氏字指。初平時從三輔客荊州。

邯鄲淳の学問は、古文学的傾向にあり、文章に優れ、また文字の学を良くした人で、魏の黄初中（二二〇～二二六）には博士給事中の職を以って嘉平石經の補修を行なっている。更に「魏志」十三王粲伝裴注魏略では儒宗に数えられている。その記載を示せば次のとおりである。

魏略以遇及、賈洪、邯鄲淳、薛夏、隗禧、蘇林、樂詳等七人爲儒宗。……至黄初元年之後、新主乃復始掃除太學之灰炭、補舊石碑缺壞。

以上によれば、邯鄲淳は荊州学派の滅亡後、魏において重要な地位を占め、魏の学界に大きな影響を与えたのである。また、後の魏の学界において重要な役割を果たした人に隗禧がいる。

隗禧は字を子牙と言い、京兆の人であるが、やはり、華北の乱を避けて、初平年間に荊州に来て⁽³⁶⁾いる。

前記の「魏略」によれば、隗禧は邯鄲淳と共に儒宗とされているが。その学問は非常に広く儒学全体に及んでいたと考えられる。隗禧の学問について「魏志」十三王粲伝裴注引魏略に次のように見える。

魚豢又常從問左氏傳。禧答曰、欲知幽微莫若易。人倫禮之紀莫若。多識山草木之名莫若詩。……豢因從問詩。

禧說齊、韓、魯、毛四家義。

隗禧も邯鄲淳と同じく荊州学派の存立期間のほぼ全時期を通して、その活動に参加していたが、建安十三年に曹操に召辟され、黄初中には譙王林の郎中となって、譙王に学問を授けている。また後に老年のため家居したが、彼に就いて学を受ける者が非常に多かったというから隗禧の魏の学界に与えた影響も頗る大きかったと言うことができよ⁽³⁷⁾

う。

次に、荊州学派の影響を強く受け、後、学校を開いた杜畿は字を伯侯と言ひ、京兆杜陵の人で、擾乱を避けて母とともに荊州に流寓した。⁽³⁸⁾「魏志」十六杜畿伝裴注引魏略に次のように言う。

畿少有大志。在荊州數歲、繼母亡。後以三輔開通、負其母喪北歸。

ここに「在荊州數歲」とあり、杜畿伝では荀彧の推挙によって司空司直となったとあるが、この官は建安九年に設置されたものであるから杜畿が荊州を去ったのはこの頃と考えられ、したがって、彼が荊州に居た時期は荊州学派が最も活発な学術活動を展開していた時期に当る。

杜畿は建安十年（二〇五）に河東太守となり、後、ここに学校を開立し、杜畿自身教授にあたり、大いに郡中を教化したと言ふ。⁽³⁹⁾また、杜畿伝裴注引魏略には次のように見える。

博士樂詳由畿而升。至今河東特多儒者則畿之由矣。

ここに見える樂詳は、字を文載と言ひ、河東の人で、建安の初め頃南陽章陵人で春秋左氏伝の大儒謝該を訪ね、左氏に関する疑滞七十二事を問うているから、⁽⁴⁰⁾左氏伝に最も通曉した学者と見られるが、次に挙げる「魏略」に「惟詳五業並授」とあり、五業とは五經の事であるから樂詳の学は当時の儒学全体に涉っており、後漢末古文学者の典型的学者であったと考えられる。「魏志」十六杜恕伝裴注引魏略に次のように見える。

樂詳字文載、少好學。……時杜畿爲太守。亦甚好學、署詳文学祭酒、使教後進。於是河東學業大興。至黃初

中、徵拜博士。于時太學初立、有博士十餘人、學多偏狹、又不熟悉不親教、備員而已。惟詳五業並授。

また、樂詳は黃初中に魏の博士となったとあり、先掲の「魏略」には邯鄲淳、隗禧とともに儒宗に教えられているから、樂詳の魏の学界への影響も大きかったと考えられる。所で、「魏略」に見える七人の儒宗のうち、三人までが

荊州学派との何等かの関係を指摘することができるとは注目に与いすることである。また、杜畿がこの時期に河東に学校を開立して儒学を大いに復興したことは、荊州学派からの影響を強く受けたためであったと思われる。即ち、杜畿は先述したように建安初期の数年間荊州に客寓していたのであるが、この数年間こそ、荊州学派の最も充実した時期に当たっていて、杜畿は、その隆盛の様子を見、大いに心を動かされ、その後河東太守となり、学宮を興した時にそれを参考にしたと考えらる。更に杜畿の三子杜寛は深く儒学を修め「春秋左氏伝解」等を著わしているが、彼も荊州新学の跡を受けたと考えられる⁽⁴¹⁾。

この他、荊州学派に参加した学者は数十人知られているが割愛する。

以上の考察の結果、荊州学派の活動に加わった代表的学者について明らかになったが、その全体的な特徴としては単に荊州一地域の規模ではなく広く中国各地から来集した天下の名儒、学者であり、その学的傾向は古文学を基礎としながらも、經学全体を総合的に把握しようとするものであった。また、これ等の学問が次の三国時代の学問に大きな影響を与え、その基礎となっていることが、魏においても、蜀においても荊州学派と関係を持つ学者が博士となっていたりして、これらの学界を指導していることによって明らかである。

三

次に荊州学派において撰定、撰述された書籍によって、その学的傾向を考察し、荊州学派の活動の具体的内容や、その後の学術に与えた影響等について究明したい。

荊州学派によって撰定、撰述された書は多数にのぼるが現在書名の判然としているものを「隋書経籍志」、「二十五史補編」の「補後漢書藝文志」、「補後漢書藝文志并考」等によって示せば次の通りである。

劉表(1)周易章句(2)後定喪服一卷(3)新定礼一卷(4)五經章句後定(5)想余注老子二卷張魯或は劉表作

王粲(1)尚書釈問(2)去伐論三卷(3)漢末英雄記十卷(4)荊州文学記官志(5)集十六篇

宋忠(1)注易十卷(2)易緯注(3)春秋左氏章句後定(4)春秋注(5)春秋伝(6)春秋緯注(7)楽注(8)楽緯注(9)孝經注(10)孝經緯注(11)孝經援神契注(12)法言注十三卷(13)太玄經注九卷(14)太玄解(15)世本注四卷(16)世本別録一卷(17)老子注

潁容(1)春秋左氏條例

劉歆(1)荊州星占三十卷⁽⁴²⁾

これ等のうち最も重要なものは「五經章句後定」であるが、この撰定時期は先述したように、建安五年から建安十年までの五年間である。「五經章句後定」は劉表の名で伝わっているが、実は、宋忠、綦母闓を中心とする多くの学者の協力によって撰定されたものであった。「魏志」劉表伝裴注引英雄記に次のようにある。

州界羣寇既盡。表乃開立學官、博求儒士、便綦母闓、宋忠等撰定五經章句、謂之後定。

ここで注意されるのは単に「五經章句」と言はないで「後定」という言葉を付していることであるが、「劉鎖南碑」(祭中郎集所収)に「五經章句後定」の撰定目的について次のように見える。

深愍末學遠本離質、乃令諸儒改定五經章句。刪割浮辭、芟除煩重。贊之者用力少而探微知機者多。又求貴書、寫還新者、留其故本、于是古典墳集、充滿州閭。

これによれば、それまでの学問が本質から遠く離れてしまっている状態を正そうとして浮辭や煩雜な部分を取り除いたとあるから、この「後定」にはそういう荊州学派の積極的な意味が含まれていると見られる。

ところで、この時期に儒家經典の全般に涉って統一的理念に基づく改定が組織的に、しかも、全国の学者を多数集めて行なわれた事は大きく変化しつつあった経学の方に多大な影響を与えたであろう。それは、また、鄭玄等の活

動とともに後漢末の經学が辿った全般的傾向と密接に関連するものでもあったのである。そのことについては後述するが、荊州学派の著述にはこの五經に関する他、緯書にも宋忠による注解があり、曆に関する書や揚雄の「太玄經」に対する注解等非常に広汎に及んでいる。このうち、荊州学派の学術の特色は易と春秋と「太玄經」に最も良く表明されていると言ふことが出来る。

まず易について見てみると、それは鄭玄と同じく古文学の費氏易の系統を引くものであったと思われる。それについて張惠言は「易義別録輯本」序の中で次のように言う。

(劉)景升章句、缺略難考。案其義于鄭爲近、大要費氏易也。

これによれば、劉景升、即ち、荊州学派の易義は鄭玄のそれと近く大要は費氏易であったというのであるが、その当時の両者を呉の虞翻は「呉志」虞翻伝引上奏文の中で次のように評している。

北海鄭玄、南陽宋忠雖各立注、忠小差玄、而皆未得其門、難以示世。

また加賀栄治氏は、鄭玄本は劉向校定本から荊州の学の後定本に移向して行く直前の過渡的形態であるとし、抛伝解經法が支持、推進されて行く学界の趨勢の中では当然鄭注本は荊州後定本に推移するにいたるであろうとされる。⁽⁴³⁾

しかし、鄭玄の易本と荊州学派の易本とが互いに類似しているものであっても、虞翻が述べているように両者は自派の優位を確立しようとして対立していたのである。

これについて何啓民氏は「魏晉思想與談風」において後漢末における經学は鄭玄の学と荊州学派の二つの優れた成果があるとし、更に建安初年の、中国の經学は主に北方では鄭玄の学が学ばれ、南方では荊州学派の学問が学ばれたとする。⁽⁴⁴⁾

また、湯用彤氏は三国時代の易学の傾向は地域的に三つに分類することが出来るとし、次のように言う。

(甲) 江東一帯虞翻、陸績等人為代表。

(乙) 荊州以宋忠等為代表。

(丙) 北方以鄭玄、荀融等人為代表⁽⁴⁵⁾

このうち宋忠を中心とする荊州学派の易学が最も新しく進んでいるものであり、虞翻陸績を代表とする江東一帯の易学は、荊州学派の新らしい経義の影響を頗る受けていて、北方の鄭玄、荀融等が漢儒の象数の易学を祖述している最も古い傾向にあったと言ひ、更に前の二つのスクールでは易経を講ずると同時に、揚雄の太玄経からの影響を強く受けていることを指摘している。⁽⁴⁶⁾

次に、この「太玄経」と荊州学派の關係について考えてみたい。

荊州学派の五業従事宋忠が揚雄の学を非常に重視していたことは、宋忠に「太玄経注」、「太玄解」、「法言注」等の著書があり、宋忠から学を受けた魏の王肅や李仁の子、李譔に太玄経に関する著述があったこと、⁽⁴⁷⁾また、呉の学界でも宋忠の「太玄経」の注解書を重要視していたこと等⁽⁴⁸⁾によって明らかである。

揚雄は易経を非常に重んじた人であるが、この太玄経は易の輔翼として、易経の形式に範を取って作られたものである。⁽⁴⁹⁾

揚雄は「太玄経」述作の意図を仁義を明らかにし、みだれを正すためであると言っている。⁽⁴⁹⁾即ち、当時の経学が讖緯思想等と結びついていたのを経学本来の姿に正すことを目的としているのである。しかし、その内容を見ると老子の思想が非常に多く認められるが、それについて、揚雄は「太玄賦」の中で次のように言う。

觀太易之損益兮、賢老氏之倚伏、省憂喜之共門兮、察吉凶之同域。

これによれば、揚雄は「太玄経」において易と老子を接合しようとしたようであるが、要するに老子の思想によつ

て易を改変したのである。⁽⁵⁰⁾

しかし、揚雄は全面的に老子の思想を受け入れたわけではなく、老子思想のうち道德を言っている所は取り入れ、仁義を破壊し、礼学を絶滅しようとする点は否定している。⁽⁵¹⁾

そこには儒家としての当然の限界があったわけであるが、揚雄のこのような傾向は桓譚、王充、張衡、崔瑗等に受け継がれ、当時蔓延していた讖緯思想や迷信を否定し、論理的合理的思想を展開し、後漢の学術の中で一つの特殊な流れを形成していったのである。

宋忠の学問傾向は実はこの通理の学につながっていたと考えられる。また、經典釈文によれば、宋忠には老子の注があったとあり、⁽⁵²⁾宋忠の学には老莊思想からの強い影響もあったと思われる。

ところで、これ等の学問傾向は荊州学派の活動の基本理念となったのであるが、このことについては加賀栄治氏の既に指摘される所である。⁽⁵³⁾

次に春秋左氏伝について見てみると、初平年間には早くも穎容が多数の門徒とともに荊州に来て、「春秋左氏條例」を撰述している。また、先述したように蜀の尹默、李仁は荊州に遊学し、宋忠や司馬徽より古文学を受業し、特に左氏春秋に精通したとあるから、宋忠、司馬徽も左氏伝の大師であったと考えられる。「蜀志」卷四十二尹默伝に次のようにある。

乃遠游荊州、從司馬德操、宋仲子等受古学。皆通諸經史。又專精于氏春秋、自劉歆條例、鄭衆、賈逵父子、陳元方、服虔注說、咸略誦述。

この記述に従えば、荊州学派には劉歆以来の古文学の大儒の研究成果がすっかり備わっていたようであり、先掲の「蜀志」李譔伝によれば賈逵、馬融の学に依準して鄭玄の学とは異なっていた。しかし、基本においてはこのように

古文学の前儒の成果を継承しながらも、先に見たように公羊伝の学者、綦母闔の如く今文家でも重要な位置にあった事から考えて、荊州学派の春秋学も鄭玄のそのような方向にあったと思われるのであるが、李譔伝に鄭玄の学とは異なっていたとあるのは荊州学派の解釈態度が揚雄以来の合理主義に基礎を置いているからであると考えられる。

四

以上の考察の結果、荊州学派の内容についてほぼ明らかになったと思われるが、この結果、荊州学派について次のようなことが言える。

まず第一に挙げられる重要点は荊州学派の活動が、全中国が未曾有の戦乱と慌廢に包まれている中で、劉表の保護のもとに十分な資力を得て大規模に展開されたことである。

これによって、荊州には戦乱を避けて各地から様々な傾向の学者が多数来集し、それが荊州学派という同一の場で学問活動を行なうことになったが、これによって、それまでの個別化され、固定化された官学を中心とする形態と違って、多様な学問の接触の中から、それらを総合し、統一しようとする新傾向が創造されるのは必然的方向である。

それは「五経章句後定」の撰定意図や王粲の「荊州文学記官志」に見られる荊州学派の五経観によく表明されている。

ところで、当時の経学の方法は、既に今古文の対立的発展を終え、古文学を基本としてはいたが、今文学をも自由に取り入れ、更に自説を加えてそれまでの経学を体系化しようとするものであった。その最も代表的な学者は鄭玄であったが、前述したように、そういう点においては荊州学派も同一の方法にあったといえる。所が荊州学派は鄭玄の学に対して悉く対立しているように見える。例えば王粲は鄭玄の「尚書注」に反対してい、宋忠の易義と

鄭玄のそれとは互いに批難し合っている。

また、春秋左氏伝について見ても、荊州学派の学を祖述した李譔の学は鄭玄のそれと異なっていたし、同じく荊州学派の宋忠より受学した王肅の学はいたる所反鄭玄の立場に立っている。このような対立には経書解釈の基本的な相違が当然あるはずである。それは、鄭玄が後漢の古文学的傾向にある通儒の学を基本とするのに対し、荊州学派の経書体系は、同じくそれを受容した上で更に揚雄、桓譚、王充、張衡、崔瑗と続く漢代合理主義の精神を基本にしている所からくる相違ではないかと考えられる。荊州学派の傾向がこのようなものであったことは「南齋書」卷三十三王僧虔伝の誠子書に荊州学派の著述が「荊州八賸」と呼ばれ、清談をするものの必読書として用いられていたことや、荊州学派から強い影響を受けて形成された魏の王弼の学問が、前儒の説を継承しながらも老莊思想に傾き、玄学を樹立するに至った事によって明らかである。この事は逆に荊州学派の活動がその後の老莊思想興隆に大きな影響を与えたと言いうことができよう。

更に、やがて経学が大きく北学と南学に二分されたのであるが、経学史上、北学と南学に二分される起点は鄭玄の学と荊州学派の新学との対立的な発展からであったと見られる。

また荊州学派の新学の影響は魏、呉、蜀等ほとんど全中国に及んでいることは先の考察で明らかであるが、周寿昌が指摘するようにそれまでの華北文化の絶対優位の状態に対し、荊州学派は華南の文化興隆の端初を開いたと言いうことが出来よう。⁽⁵⁴⁾

次に、荊州学派においては、何故に経学の体系化の理念として、老莊思想に基づく論理的合理的方向が受容されたかということを考えねばならないが、その一つの要因は、上述のような荊州学派の成立事情によって、鄭玄の学など当時の学問の研究成果がいち早く荊州学派に伝えられ、その体系化の方向を一段と発展させようとするのに揚雄以来

の老莊哲学に影響された合理主義が適していたという点にあると考えられる。

註

(1) 「後漢書」卷七十四下、劉表伝

(2) 「祭中郎集」劉鎮南碑

(3) 「後漢書」卷六十四、趙岐伝

(4) 「魏志」卷二十一、衛覬伝「人民流入荊州者十万余家」

(5) 「後漢書」卷七十四下の劉表伝の記述する所に從えば建安三年に張羨を降しているように見え、また張羨の叛乱の原因も各史書によって相違しているが曹操、袁紹の動きや前後關係を考えると魏志の劉表伝の記述が史実に近いと思われる。魏志卷六劉表伝には次のように見える。「長沙太守張羨叛表。表困之連年、不下。羨病死。長沙復立其子憚。表遂攻并憚。」なお資治通鑑の建安五年の条には次のようにある。「表攻張憚平之。表地方数千里、帶甲十余万。」

(6) 「魏志」卷六、劉表伝

(7) 「後漢書」卷七十四下、劉表伝には張羨の乱の平定に続いて次のような記述がある。「於是開土遂広……関西、亮、予学士帰者蓋有千数。表安慰賑贍、皆得資全、遂起立学校、博求儒術。葦母闔、宋忠等撰立五經章句、謂之後定。」また「魏志」卷六、劉表伝の裴松之注引英雄記には「州界羣寇既尽。表乃開立学官、博求儒士。」とある。

(8) 「魏志」劉表伝「太祖軍到襄陽、琮率州降。備走奔夏口。太祖以琮為青州刺史封例侯、蒯、越等侯者十五人、越為光祿勳、嵩大鴻臚、義侍中、先尚書令、其余多至大官」

(9) 「蜀志」の各伝によれば荊州に在つて後、蜀に仕えたうちには襄陽の向朗、馬良、馬謖兄弟、南陽の陳震、零陵の劉巴、南陽の黄忠、山陽の伊籍等多数にのぼるが魏に仕え人物の出身と比較すると荊州地方の出身者が多い。

(10) 二の顚容についての記述参照

(11) 二の王粲についての記述参照

(12) 「搜神記」卷六に「建安初荊州童謡曰、八九年間始欲衰。至十三年無子遺。言自中興以来荊州独全。乃劉表為牧、民又豊樂。至建安九年当始衰、始衰者謂劉表妻死、諸將並零落也。十三年無子遺者、表当又死国以喪敗也」と見える。なお文中「中興以来」とあるのは黄巾の乱の起つた中平年間（一八四～一八九）の誤りであろう。所で「魏志」卷六劉表伝におい

て、盧弼は「十年以前、表勢方盛」と言っている、搜神記の記述するように建安八、九年に至って荊州が衰退に向い初めたのは劉表の妻が没して、後妻を蔡氏から入れた事により、蔡瑁、張允等が勢力を得、劉表の後継者問題を通して内部分裂が表面化したためであるが、盧弼の言うように建安十年以前はさほどの波瀾もなく過ぎたと考えられ、また外部との抗争による慌廢ということもなかったから、特に學術活動においては内部分裂が激化するまでは活発な活動が続けられたであろう。従って王粲の言う最も輝かしい成果を収めた五年間とは建安五年から同十年までと考えられる。

(13) 例えば、後述する杜畿は荊州学派の中間に當る数年間、荊州に寄寓していたが、後に魏に仕えて、建安十年に河東太守となり、学宮を開いて大いに學術活動を行なっている。

(14) 註(4)参照。

(15) 註(7)参照。なお荊州学派中期にはその名が四方に知られるようになり、蜀の尹默、李仁、或は東莞の綦毋闔のように学問を主目的として荊州に来る学者が多かったと考えられる。

(16) 「周易補疏」序

(17) 「後漢書」卷五十六、王暢伝「同郡劉表、時年十七、從暢受学。」

(18) 王暢の学問の傾向については直接知る事ができないが後漢書王暢伝に劉表に答えた言葉の中に史記、論語、孟子の語が見える。

(19) 「後漢書」卷六十七、党錮伝に「郭林宗……羊陟為八顧、顧者言能以德行引人者也。張儉、岑暉、劉表、陳翔、孔昱、范康、檀敷、翟超為八及、及者言其能導人追宗者也」とある。

(20) 「後漢書」卷七十四下劉表伝に「關西、亮、予学士帰者蓋有千数。表安尉賑贍、皆得資全。」とある。また何焯は次のように言う。「尽費於養士、亦不厚斂於民。故能保境、歿身也。」(魏志劉表伝集解所引)

(21) 劉表の撰著として「新定礼」や「周易章句」等の名が知られているが、これは劉表の直接著わしたものではなく、多くの学者の協力によるものであろう(加賀榮治著「中国古典解釈史」第三章第一節参照)

(22) 「魏志」卷二十一、王粲伝「表以粲貌寝而体弱通悦、不甚重也」

(23) 「魏志」卷二十一、王粲伝に「左中郎將蔡邕見而奇之。……聞粲在門倒屣迎之。粲至、年既幼弱、容狀短小、一座尽驚。邕曰、此王公孫也。有異才、吾不如也。吾家書籍文章尽当与之。」とある。

(24) 魏の文帝の典論(北堂書鈔一百)に「王粲長于辞賦」とある。

(25) 「魏志」卷二十一、王粲伝

(26) 「唐書」儒学伝の元澹伝にもその事が見えるが今、翁注困学紀聞卷二、書、によって示せば次の通りである。「顔氏家訓云、王粲集中難鄭元尚書事。今僅見於唐元行冲稊疑。〔原注〕王粲曰、世称伊雒以東淮漢以北、康成一人而已。咸言先儒多闕、鄭氏道備。粲竊嗟怪、因求所学得尚書注、退思其意、意皆尽矣。所疑猶未論焉、凡有二篇。」

(27) 註(7)参照。なお後漢書のこの記述によれば関西、兖州、予州の学者が多数荊州に集まったのは学校開立以前、即ち荊州学派初期におけることが明らかである。

(28) 註(12)参照。

(29) 孔衍「漢魏春秋」「劉琮乞降、不敢告備。備亦不知。……琮令宋忠詣備宣旨。是時曹公在宛。備乃大驚駭、謂忠曰、卿諸人作事如此。不早相語、今禍至方告我、不亦大劇乎」

(30) 「蜀志」卷四十二、尹默伝裴注所引魏略「其子与魏諷謀反、伏誅」

(31) 王肅が十八歳の時は建安十七年(二二二)に当るから、このことは宋忠が曹操に仕えて四年目の事である。

(32) しかし、蜀の学界には鄭玄の学を奉ずる許慈、或は今文学者の任安より受学した周羣等が居て、前者は博士に後者は儒林校尉となっているから蜀の学界もその当初から多様であったことが知られる。「蜀志」卷十二許慈伝、同周羣伝参照。

(33) 「蜀志」龐統伝によれば建安初年には司馬徽はまだ潁川に居たことになるが、「魏志」劉表伝では既に中平年間には荊州地方に来ていたように見えていて互いに矛盾している。しかし前者の記述は余りに説話的であること、また「資治通鑑」の漢記五十七では司馬徽を襄陽人としている事等から考えると司馬徽は相当早くから荊州に流寓していたものと思われる。

(34) 註(7)及び荊州文学記官志参照。

(35) 「魏志」王粲伝によったが北史江式伝引後魏書では陳留人としている。

(36) 「魏志」卷十三王肅伝裴注引魏略「隗禧字子牙、京兆人也、世單家少好学。初平中三輔乱、禧南客荊州」

(37) 同前魏略「黄初中、為譙王郎中。王宿聞其儒者、常虚心従学。禧亦敬恭以授王。……年八十余、以老処家、就之学者甚多」

(38) 「魏志」卷十六、杜畿伝「杜畿字伯侯、京兆杜陵人也。会天下乱、遂棄官客荊州。建安中乃還。荀彧進之太祖。太祖以畿為司空司直」

(39) 「魏志」卷十六、杜畿伝「又開学宮、親自執經教授、郡中化之」また同伝に「畿在河東十六年、常為天下最」とある。

(40) 謝該については「後漢書」卷七十九下儒林伝に「謝該字文儀、南陽章陵人也。善明春秋左氏為世名儒、門徒數百千人。云々」とあるが、ここで注意される事は荊州学派の五業従事宋忠もやはり南陽章陵の人で学問も左氏春秋に通じていたことであって時代的にも同時代であるから何等かの関係があったかもしれないが今は明瞭にしがたい。

(41) 「魏志」卷十六杜畿伝注引杜氏新書

(42) これ等の書名のうち劉表の「周易章句」、「新定礼」、宋忠の「春秋左氏章句後定」等は「五經章句後定」の一部と考えられる。また劉表の「想余注老子」と宋忠の「老子注」はともに經典釈文に見えるものである。

(43) 加賀栄治氏「中国古典解釈史」、第三章王弼の「周易注」における新解釈。

(44) 到了東京末年、始有較佳的成績出。一以鄭成為。一則為荊州劉表所倡。……而当漢獻帝建安初年、中国本土的經学、伊洛以東京淮漢以北、多主鄭学。而大江以南遠及江東巴蜀並從荊州。雖意旨不同、然於章句之簡化皆具同樣之熱誠。这是对於漢經学的正統——章句之学所作的最後努力和最後的掙扎。

(45) 湯用彤著「魏晉玄学論稿」

(46) 湯用彤著「魏晉玄学論稿」

(47) 「魏志」卷十三、王肅伝。蜀志四十二、李譔伝

(48) 陸績、「述玄」(太玄范望注本)

(49) 「法言」問神篇「或曰、玄何為。曰、為仁義。曰孰不仁為仁、孰不為義。曰、勿雜也而已矣」。

(50) 「太玄経」が老子と密接な関係にあることはその書名にも既に表明されている。即ち、「老子」第一章には「此兩者、同出而異名、同謂之玄。玄之又玄、衆妙之門」とあり、またこの他、六章、十五章等にも見えているが、これによれば、玄とは万物のよって生じる根源を言い、道とほぼ同じ意味を持っている。

(51) 「法言」問道篇「老子之言道德、吾有取焉耳。及提提仁義、絶滅礼学、吾無取焉耳」

(52) 「經典釈文」、老子道経音義「宋衷注本云、経同声」

(53) 加賀栄治氏「中国古典解釈史」第二章王肅の反鄭玄的解釈の実能・本質とその後の方向、第一節反鄭玄的解釈形成の由拠。

(54) 「魏志」卷六劉表伝注引「後人謂、漢儒文学盛於西北。自晋人之渡江之後、東南人才始盛。景升実啓其端」